

森 正人 著

『四国遍路 八ヶ所巡礼の歴史と文化』

中央公論新社 2014年12月 204頁 760円＋税

本書は四国遍路について、その実態が確認され得る17世紀後半からはじまり、近世、近代、そして現代に至る歴史を、文書や絵図などの様々な歴史史料や古写真、近代のメディア関連の資料、そして現代の行政文書、観光案内、マスメディアの記事など実に多様な資料を用いて丁寧にまとめている。また、主要かつ必須の先行研究も多寡なく適切に引用、参照されており、一般向けの書物であると同時に四国遍路に関わる歴史学、民俗学、宗教学、地理学、社会学などの様々な研究分野の入門書としても最適な一冊である。また、本書は明快かつ平易な表現と淀みのないなめらかな文章によって、まるで実際に四国遍路の道中を旅しているかのごとき感覚を読者に与えてくれる。

著者は本書でも述べているように、大学院時代から四国遍路という研究対象に出会い、現在もお追いの旅を続けている。その過程で文化に関わる多面的かつ膨大な研究を進めており、欧米の地理学会で提唱されている概念や研究動向を積極的に紹介している。近年ではDoreen Masseyの“*For Space*”の訳書『空間のために』を出版しており、きわめて精力的に文化の背後に存在する「人間社会の複雑さ」を追究し続けている。この姿勢は本書でも一貫しており、「私は四国遍路の研究をしてきたのではなく、四国遍路をとおして何かを考えようとしてきた。(略)その『何か』をととても単純に言えば、いろんな視点を持つことで見えてくる人間社会の複雑さである。」という、あとがきでの著者の言葉が示すとおりである。

さて、ここで本書の構成と各章の要約を示しておく。

序章 巡礼とは

第1章 起源を探る

- I 四国遍路の始まり
- II 基本的な思想
- III 巡礼とお接待

第2章 江戸時代の四国遍路

- I 巡礼の実態
- II 若者たちの歩き方

第3章 近代の巡礼者たち

- I ガイドブックと交通機関
- II 新聞記者と外国人

第4章 貧困、差別、行き倒れ

- I 貧困、ヘンド、カッタイ
- II 取り締まり

第5章 近代化への道

- I 整いゆく交通網
- II 近代化がもたらした質的变化とは
- III 宗教的意義の変化

終章 レジャー化する四国遍路

- I 戦後の転換
- II 一九八〇年代の四国遍路
- III 巡礼の物質性
- IV 四国遍路道を世界遺産に

序章では、巡礼という行為・現象についての類型化を挙げ、四国遍路の位置づけを行う。また、著者の経験と四国遍路という研究対象との出会いについても述べられている。

第1章では、四国遍路の起源について、主に歴史学の先行研究の成果をもとにして、その起源を史料で確実にたどることができるのが江戸時代前期すなわち17世紀後半であることを示している。また、江戸時代前期の四国遍路が現在のように必ずしも弘法大師と積極的に結び付けて理解されていなかった点や、札所の合理的な巡礼の順番、徒歩以外の移動手段などが四国遍路の指南書に記載されている事実が示されている。

第2章では、四国遍路の特徴や内容が江戸時代を通じてどのように変化していったかについて、多くの史資料を用いて検討している。その中では17世紀初期には八十八ヶ所のうち複数の寺院が荒廃していたが、江戸時代を通じて復興されたことや、東国からの巡礼者も現れたこと、四国諸藩によって巡礼時季が規制されたことが示されている。また、地元の地域社会の中には巡礼をライフステージの通過儀礼と位置づけるケースがあった。

第3章においては、国家の近代化にともなう四国遍路の変容について、ガイドブックや交通機関の発達に注目して論じられている。興味深いのは、江戸時代に続いて、明治から大正時代にかけても、巡礼手段を徒歩に限定する言説がそれほど

強かったわけではない、という点である。また、新聞社が自社の記者に巡礼させ、その体験記を連載することで、新聞というメディアを通じて四国遍路が広く大衆に知られていった様子も示されている。

第4章では、四国遍路の巡礼者の多くが貧困や差別を経験し（ハンドやカッターなどの蔑称で呼ばれもした）、江戸時代は諸藩により、明治時代以降は警察によりそれぞれ取り締まられていた事実が示されている。特に後者においては、物乞いをしながら札所を回り続ける「職業遍路」が存在しており、警察や行政のほか、知識人たちによって否定的な眼差しを向けられていたという。これは現代バングラデシュにおいて物乞いに関して展開される宗教的、社会的、政治的な緊張関係を描いた杉江の論稿<sup>1)</sup>とも通じるものがあると評者は考える。また、近代的な福祉政策により「職業遍路」が次第にその姿を消していったことが述べられているが、史資料の不足によりその過程が明らかにできていない。この点については、今後新たな史資料の発見と研究の進展を期待したいところである。

第5章では、四国遍路が受けた近代化の影響について述べられている。たとえば、交通網や郵便の整備、新聞などのメディアの発達、さらに合理的かつ効率的な四国遍路である「モダン遍路」の登場などである。他方、昭和戦前期に設立された「遍路同行会」が「本当の巡礼」を主張する中で、歴史とは切り離された「伝統」がイデオロジカルに形作られていく過程や、太平洋戦争前後の国家政策による徒歩の強制などの政治的影響も紹介され、四国遍路の変化と現在の姿につながるプロセスが示される。

終章では、第二次大戦後から現在に至る四国遍路の更なる変化と今後の動向について述べられている。とりわけ戦後の幾つかの節目を経て進んだ四国遍路のレジャー化、個人化、観光化とそれによる地元社会との関係の希薄化、行政による巡礼路の整備と物質性の変化、観光化の中で登場する「伝統的・歴史的な日本人の心」の表象、世界遺産登録をめぐる四国遍路の歴史の単純化、などである。

以上が各章の要約であるが、四国遍路の起源に関わる種々の伝説（言説）が各時代の多様な文化

的、社会的、政治的要因によって生み出された結果、現在の四国遍路の姿が形作られてきた、というのが本書全体を貫く重要なテーマではないだろうか。四国遍路の衣装ひとつとってみても、菅笠、金剛杖、白装束などが昭和戦前期に特定のイデオロギーに基づいて作られたものであることは、ホブズボウムの「創られた伝統」<sup>2)</sup>論を思い起こさせてくれるし、あたかも「脈々と受け継がれてきた日本人の心」という表象を、我々はともすると気づかぬうちに刷り込まれている危うさを、本書は注意深く教えてくれている。

次に、本書について評者が抱いた疑問もしくは要望のうち、全体に関わるものを3点ほど述べておきたい。

1つは、著者が第1章で「修験道的な『辺路』や『辺地』の世界観を脱して、弘法大師信仰を基盤とした『遍路』への世界へと向かっていくための重要な変化」として「徧礼」という語に注目している点についてである。四国遍路をめぐるこの辺路-徧礼-遍路という一連の変化について、可能ならばより詳細な説明が示されることで、読者に変化の重要性がより明快に伝わるものと思われる。

2つ目は、地図表示に関する点である。本書には四国八十八ヶ所の県別の詳細な地図が示されており、本書を読み進める上でありがたい「道標」になっているが、四国遍路に関わる現象について、地図化されることでイメージが一層膨らむと思われるものがいくつか見受けられた。たとえば、第1章に登場する「接待講」の四国内外の分布や、第2章の「七ヶ所詣り」など、地元住民が行っていた寺院参詣のルートや対象寺院の分布などについて、地図化されることによって四国遍路に明るくない読者が空間的な現象として四国遍路を視覚的に捉え、理解をより深めることが出来ると思われる。

そして3つ目は、四国遍路の宗教性に関するものである。著者は四国遍路の宗教的意義が曖昧で、歴史的にみても「限りなく世俗的な巡礼」であり、昭和戦前期に宗教的文脈と結び付けられるようになったと述べている。たしかに、四国遍路の歴史的経緯をたどるとき、物見遊山や成人の通過儀礼といった意味を持つ時代もあったほか、そもそも江戸時代には弘法大師と積極的に結び付け

られたわけではない、という事実が様々な史資料によって示されている。では、各札所での読経や功德を積むためのお接待などの行為も、宗教的意義が曖昧ということになるのだろうか。評者はこの疑問について、宗教的というよりもむしろ信仰的、という説明が可能ではないかと考える。著者が指摘するように、明確な教団や教義と必ずしも積極的に結びついていなかったとしても、巡礼者や地元住民、講接待を实践した人々、すなわち四国遍路に関わってきた人々は、人知を超えた畏怖すべき存在や理性では説明がつかない不思議な導きを心のどこかで信じ、期待し続けてきたのではないだろうか。そうだとするならば、四国遍路というものを宗教的ではなくとも信仰的と呼ぶことは可能であると考え。これは四国遍路ばかりでなく巡礼という行為・現象について広くあてはまる疑問であると思われる。書評の域をいささか超えてしまったが、宗教学的にみても四国遍路がある種のスピリチュアリティの実践であり、島菌のいう「宗教の私事化」<sup>3)</sup>の先駆的な事例とも捉え得るのかもしれないと評者は考えるが、はたしてこれは妥当なのか、それとも的外れなのか、もし可能ならばご教示願いたい。

最後に、評者の問題関心と関連付けながら本書の評を締めくくりたい。

著者は本書の中で、江戸時代には巡礼者たちの多くが貧しい農村での口減らしの対象であった点や、諸藩による巡礼者の取り締まり、行き倒れや病人に対する地元住民の対応、近代以降の警察による取り締まり、メディアによる否定的な眼差し、ハンセン病患者の遍路をめぐる対応、そして

近世から近代にかけての（そして現代も？）接待を断られるケースなど、四国遍路が展開される空間には常に何らかの排除が存在してきた点を指摘する。評者は四国遍路を行ったことはないが、仮に遍路となって巡礼路を歩く機会があれば、眼前に広がる四国遍路の道、道標、宿舎、寺院などの景観は、まさにDavid Sibleyの言う「排除の景観 landscapes of exclusion」<sup>4)</sup>であろう。最初に述べたように、著者は四国遍路そのものではなく、その背後に存在する人間社会の複雑さの追究という本書の根底にある動機を示している。本書は人間社会の様々な排除という行為・現象の重層性、複雑さを改めて我々に示し、人間の本質の一端を垣間見せてくれている。そういう意味でも、本書をぜひ一読されたい。

（麻生 将）

#### 〔注〕

- 1) 杉江あい「バングラデシュ農村部における「物乞い」の慣行と行動」地理学評論86-2, 2013, 115-134頁。
- 2) E・ホブズボウム, T・レンジャー編, 前川啓治, 梶原景昭他訳『創られた伝統』, 紀伊国屋書店, 1992, 10頁。
- 3) 島菌進「現代宗教と公共空間—日本の状況を中心に—」社会学評論50-4, 2000, 541-555頁。
- 4) David Sibley, *Geographies of Exclusion: Society and Difference in the West*, Routledge, 2003, p.183.